E 8　住生活面における子どもの家事参加

和歌山大教育　梅原清子

目的　子どもの家事労働へのかかわりが薄くなったのと反比例的に、その教育的価値が見直されてきている。本報告では、身辺の整理整とんやそうじなど、住生活に関する側面を中心に、子どもの家事参加の状況を明らかにし、子どもの生活空間条件との関連を検討する。

方法　小学校4・6年生とその親を対象に、衣食住の身辺処理を含む家事参加の実態と意識および家族・居住条件についてアンケート調査をおこなった。地域差を配慮のうえ、和歌山市内4小学校を抽出し、子どもは教室で記入、親の調査票は持ち帰り方式で回収、子ども511票、親447票を得た。調査時期は1997年9～10月である。

結果　身辺の整理整とんやそうじをしている子どもは、親の回答では7割弱で、女子に多いが、学年差はない。子ども部屋の保有と使用との関連でみると、保有する者、就学前の早い時期から与えられている者の方が、より実施状況が好ましく、子ども部屋は肯定的にとらえられる。また、子ども部屋での就寝は7割に満たず、他の生活行為も勉強9割を除くと約5割と、使用率は高いとはいえないが、なかでは実施している子どもの方が概して高くなっている。子どもにさせていない理由は、「するように言っても全然しない」が大半を占め、食事の準備・後片付、衣類の出し入れと比べても高く、親の焦立ちと諦めぶりがうかがえる。ただし、子どもの側から整とんやそうじについての自己評価をみると、親の回答より優れ、かつ子ども部屋の有無とは無関係である。